

鳥栖市文化財調査報告書第90集

京
町
遺
跡

京 町 遺 跡

京町遺跡 4 区埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥
栖
市
文
化
財
調
査
報
告
書
第
90
集

2 0 1 7

鳥 栖 市 教 育 委 員 会

二
〇
一
七

鳥
栖
市
教
育
委
員
会

序

鳥栖市は、脊振山地の東端部の九千部山を主峰として、九州最大の大
河、筑後川に面した緑と水豊かな内陸都市です。この地域は、古来より
現代に至るまで九州の交通の要所で流通の拠点であることから、貴重な
文化財が数多く存在しています。

本書は、マンション建設に伴い発掘調査を実施した、鳥栖市本鳥栖町
に所在する京町遺跡の文化財調査報告書です。調査の結果、弥生時代と
中世の遺構が確認され、貴重な資料が多く出土しました。特に中世の溝
は当時の屋敷地を示す区画溝と考えられます。

本書を通じて地域の文化財に対して一層のご理解をいただき、また学
術文化の向上に寄与するものであれば幸いに存じます。

最後になりますが、開発と文化財保護との調整に、ご理解とご協力を
いただきました第一交通産業株式会社の皆様、ならびに発掘作業や整理
作業に従事された方々に厚く御礼を申し上げます。

平成 29 年 3 月 31 日

鳥栖市教育委員会

教育長 天野 昌明

例 言

1. 本書は、マンション建設に伴い、鳥栖市教育委員会が平成 27、28 年度に実施した佐賀県鳥栖市本鳥栖町字下鳥栖に所在する京町遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成 27、28 年度に実施し、整理作業及び報告書作成は、平成 28 年度に行なった。
3. 発掘調査にあたっては、第一交通産業株式会社ならびに地元の方々の協力を得た。
4. 出土遺物の整理を含む報告書作成作業は、牛原町文化財整理室で行なった。
 - ・遺構実測 (株)埋蔵文化財サポートシステム
 - ・遺構写真撮影 湯浅満暢、内野武史、島孝寿
 - ・遺物写真撮影 湯浅満暢、内野武史
 - ・遺物整理作業 河原まゆみ・榎崎孝子・松崎友子・毛利よし子
 - ・遺物実測 松崎友子・毛利よし子
 - ・図面トレース 松崎友子・毛利よし子
5. 本書の執筆は、湯浅満暢、内野武史が担当し、湯浅満暢が編集を行なった。

凡 例

1. 遺構については略号および番号を用いて表記する。
S K：土坑 S D：溝 P：小穴・柱穴
2. 調査区は A 区、B 区、C 区の 3 カ所に分かれている。
3. 遺構番号については、A 区、B 区、C 区の順に種類毎とした。
4. 遺構の寸法数字は m 単位、遺物の寸法数字は c m 単位を原則としている。
5. 遺構配置図および遺構図に用いた方位は、磁北である。

本文目次

第1章 調査の概要	1
I. 調査に至る経過	1
II. 調査の組織	1
III. 調査の経過	2
第2章 地理的・歴史的環境	2
I. 地理的環境	2
II. 歴史的環境	3
III. 京町遺跡周辺の状況	5
第3章 調査の内容	7
I. A区の調査	7
II. B区の調査	9
III. C区の調査	16
第4章 まとめ	20

挿図目次

図1 鳥栖市位置図	2	図2 周辺遺跡分布図	5
図3 発掘調査地点位置図	6	図4 調査区配置図	7
図5 A区遺構配置図(1/100)	7	図6 SD01(1/40)	8
図7 B区遺構配置図	9	図8 SK01(1/40)	10
図9 SK02(1/40)	10	図10 SK03(1/40)	11
図11 SK04(1/40)	11	図12 SK01出土遺物(1/3)	12
図13 SK02出土遺物(1/3)	14	図14 SK03出土遺物(1)(1/3)	14
図15 SK03出土遺物(2)(1/3)	15	図16 SK04出土遺物(1/3)	15
図17 小穴出土遺物(1/3)	15	図18 C区遺構配置図(1/100)	16
図19 SD05(1)(1/40)	17	図20 SD05(2)(1/40)	17
図21 SK05(1/40)	18	図22 SK06(1/40)	18
図23 SK05出土遺物(1/3)	18	図24 SD05・SK06出土遺物(1/3)	19

表目次

表1 出土遺物観察表	21
------------	----

写真図版目次

写真図版1 京町遺跡周辺空撮(南から) 九千部山方向遠景
写真図版2 調査区全景A区・B区 調査区A区
写真図版3 調査区B区 調査区C区(北から)
写真図版4 SK01西から SK02東から SK03北から
写真図版5 SK03出土遺物状況 SK04東から SK05北から
写真図版6 SK06南から SD02南から SD03東から
写真図版7 SD05東から SD05出土遺物状況 発掘作業状況
写真図版8 SK02出土遺物(1・2) SD05出土遺物(3・4・5)
写真図版9 赤煉瓦塀遠景 赤煉瓦塀東から 耐火瓦塀

第1章 調査の概要

I. 調査に至る経過

平成25年6月4日付けで、地産開発株式会社より鳥栖市本鳥栖町字下鳥栖633-10、33、34、40番地の計6,221.07㎡について、宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査依頼が鳥栖市教育委員会に提出された。対象地区は周知の埋蔵文化財包蔵地（京町遺跡）のため、生涯学習課では平成25年7月30日～8月7日に確認調査を実施した。その結果、対象地内約1,900㎡から遺構、遺物を確認した。

確認調査の結果、遺構が確認された箇所については掘削が予定されており、取扱いについて地産開発株式会社と協議することとした。その後、開発計画が宅地造成からマンション建設へ変更となった。遺構、遺物の確認されなかった部分3,326.94㎡については、平成25年9月27日付けで、第一交通産業株式会社より鳥栖市本鳥栖町字下鳥栖633-10について発掘届が提出され、マンションが建設されることとなった。新たに平成27年11月10日付けで第一交通産業株式会社より発掘届及び調査依頼が提出され、遺構、遺物が確認された約1,900㎡について協議を行った。

協議の結果、発掘調査を行い記録保存することで合意した。発掘調査は平成28年2月1日から平成28年5月31日にかけて実施し、出土遺物・調査記録類の整理および調査報告書作成業務は、平成28年6月1日から平成29年3月31日の期間、鳥栖市牛原町文化財整理室において実施することとした。

II. 調査の組織

発掘調査は、鳥栖市教育委員会が主体となって実施した。組織は、以下のとおりである。

調査主体	鳥栖市教育委員会
	※平成27年7月に教育部から教育委員会事務局に組織変更。
教育長	天野昌明
教育部長	園木一博（～平成27年6月）
教育部次長	白水隆弘（～平成27年6月）
教育次長	江寄充伸（平成27年7月～平成28年10月） 園木一博（平成28年11月～）
生涯学習課長	佐藤敦美
生涯学習課参事	近藤信孝（～平成27年6月） 成富俊夫（平成27年7月～12月） 山津和也（平成28年4月～）
文化財係長	久山高史
文化財係主査	鹿田昌宏（確認調査担当） 向田雅彦・島孝寿・大庭敏男 湯浅満暢（発掘調査担当） 内野武史（発掘調査担当） 尾形愛美（嘱託職員）（平成28年10月1日～）
調査協力	第一交通産業株式会社
発掘調査作業員	朽木光利・杉岡俊昭・直塚功・本田洋・山口正樹 皆良田憲男・皆良田涼子・緒方幸弘
室内整理作業員	河原まゆみ・檜崎孝子・松崎友子・毛利よし子

Ⅲ. 調査の経過

京町遺跡4区として平成28年2月2日から重機による表土掘削から作業を開始した。調査は確認調査の結果を元に工事が遺構に影響する部分約500㎡をA区～C区の3つの調査区に分けて行った。2月4日より重機の表土剥ぎと並行して作業員による発掘作業を開始した。2月26日に隣接するマンションより調査区全域の空中写真撮影を行った。作業員による発掘作業は3月3日で一旦終了し、遺構実測作業を開始した。3月28日に平成27年度の現場作業を終了した。遺物洗浄作業は一部並行して行った。平成28年度の調査は4月10日に遺構実測作業を開始し、作業員による発掘作業は4月20日に開始した。発掘作業及び遺構実測作業のすべてを5月23日に終了し、現場作業を完了した。出土遺物等の整理、実測作業及び調査報告書作成作業は6月1日より牛原町文化財整理室で開始した。

第2章 地理的・歴史的環境

I. 地理的環境

佐賀県東部の鳥栖市は、筑後川流域に展開する広義の筑紫平野の一角をなすとともに、狭義の筑後平野の西北部を占める位置にある。北部は筑紫山地に限られ、南部は筑後川を境として福岡県久留米市と対する。東部は福岡県小郡市から甘木・朝倉方面へと広がる。



図1 九州の中の鳥栖市

平野に連続し、さらに東北部は三養基郡基山町から福岡県筑紫野市方面一帯の池峽を経て福岡平野へ通じる。そして西部は筑紫山地より派生した丘陵地を介して佐賀平野と接している。

地勢は、脊振山塊の九千部山(847.5 m)を主峰として三ヶ所認められる支嶺から、それぞれ東南ないしは南方向に丘陵地(洪積段丘)が伸び、ついで平坦部となって筑後川の旧流路(現新宝満川)に至る。地形は東から詳述すると、権現山より杓子ヶ峰に連なる支嶺は、柚比・今町の高位段丘に通じている。大木川はこの支嶺と、九千部山の南側より起こり城山・群石山に終わる支嶺との間の断層線に沿って流下し、山麓に神辺扇状地を形成する。大木川左岸は柚比丘陵群から曾根崎方面へ連続する標高15～80 mの低～

高位洪積段丘となり、右岸は現市街地を載せて広がる標高 15～25 mの独立低位段丘となるが、京町遺跡はこの低位段丘の南端部近くに立地する。一方、九千部山の西南側より起った支嶺は、石谷山・雲野尾峠・笛吹山へと低下し、三養基郡北茂安町千栗一帯まで連続する丘陵となっている。九千部山を水源とする四阿屋川は、この東山麓に養父扇状地を形成して安良川となる。安良川と、石谷山を水源とする沼川の間は、標高 15～80 mの低～高位の洪積段丘となり、朝日山によって北の麓地区・南の旭地区に二分される。河川はいずれも南流し筑後川へ注ぐが、下流域は標高 10 m以下の沖積低地の広大な平坦部となっている。

鳥栖市域の遺跡の分布、とくに集落遺跡の立地は、土地の自然環境と密接に関わっている。旧石器・縄文時代はもちろんのこと、遺跡が顕著となる弥生時代以降、はじめ生活の場は多くが中・高位洪積段丘上に営まれてきた。とりわけ遺跡の分布密度が高い大木川左岸と安良川・沼川右岸は、それぞれ弥生前期末まで遡る固有の遺跡群が形成・継続している。これに対し、部分的な例外があり、一概に言えないが、全体的な傾向として、鳥栖市街地の載る低位段丘あるいは神辺・養父の両扇状地は弥生中期以降、とくに古代から中世にかけて遺跡が増大するようである。また、条里制の痕跡が僅かに残る南部の低地は、最近まで河川の氾濫・耐水の常襲地であったが、こうした治水の困難な沖積低地や地盤の軟弱な扇状地は、生活領域としての進出が遅れる傾向をみせている。

鳥栖市域はとくに古代以降、律令制下の筑前・筑後・肥前三国の接点であり、大宰府・筑後国府・肥前国府を連絡するそれぞれの官道（城の山道・筑後路・肥前路）が通過する交通の要衝であった。この重要性は、現代においても変わりはない。

II. 歴史的環境

市内の遺跡は、丘陵上を中心に展開しており、近世以前の遺跡が約 190 遺跡、確認されている。また沖積層が広がる南部地区では、遺跡を殆どみることはできない。

旧石器時代は、長ノ原遺跡・本川原遺跡・平原遺跡・牛原原田遺跡で、ナイフ形石器・尖頭器・台形石器などがみられるが、明確な遺構から出土した例は現在までない。

縄文時代にはいと、今町共同山遺跡から草創期～早期にかけての刺突文土器、早期では西田遺跡から多数の集石遺構に伴い、多量の押型文土器を検出している。前期では牛原原田遺跡から曾畑式土器、中期に入ると平原遺跡から集石遺構 40 基とともに並木式土器が出土している。後期では蔵上遺跡から土器棺墓 41 基・住居跡 10 軒を検出し、土偶や十字形石器などが大量に出土している。晩期には村田三本松遺跡で甕棺墓地群が形成されている。

弥生時代前期に入ると、幸津遺跡から環濠と推定される大溝が確認され、フケ遺跡・八ツ並金丸遺跡などが立地する「柚比遺跡群」では甕棺墓地が出現する。中期になると平原遺跡・安永田遺跡、前田遺跡などで集落跡が確認されるが、安永田遺跡では青銅器鑄造遺構や銅鐸・銅矛の鑄型、前田遺跡・柚比本村遺跡・大久保遺跡・平原遺跡からも鑄型が出土している。また市内の南西部に位置する本行遺跡からも青銅器、鑄型類が出土しており、青銅器生産の拠点的な集落の存在が明らかになっている。墓域は、柚比梅坂遺跡・柚比本村遺跡・安永田遺跡などが挙げられるが、特に柚比本村遺跡からは赤漆玉鈿装鞘銅剣を含む 7 本の銅剣が甕棺墓及び木棺墓より出土し、また祖霊祭祀に使用されたとされる弥生時代最大級の大型建物跡、多数の丹塗磨研土器を含む祭祀土坑を検出している。後期に入ると丘陵部の遺跡群から中心地は中低位段丘上に移動する。本原遺跡・牛原原田遺跡・蔵上遺跡・内精遺跡・藤木遺跡などがこれにあたる。蔵上遺跡と内精遺跡で住居跡 230 軒以上、藤木遺跡からは環濠の一部と思われる大溝が確認されている。

古墳時代前期・中期には、赤坂前方後方墳、日岸田遺跡・今泉遺跡などから方形周溝墓が出土している。5 世紀になると山浦古墳群・薄尾遺跡群・所熊山古墳群などの墳墓群が形成されていく。集落は元古賀遺跡・牛原前田遺跡など現在のところわずかにすぎないが、6 世紀代に入ると平原遺跡・大久保遺跡・元古賀遺跡・

蔵上遺跡・内精遺跡などで大規模集落が形成される。また剣塚前方後円墳・東田前方後円墳・岡寺前方後円墳・庚申堂塚前方後円墳・牛原原田5号墳の5基の前方後円墳、田代太田古墳・ヒャーガンサン古墳の2つの彩色系装飾古墳が築造される。中型古墳としては梅坂古墳・神山古墳・稲塚古墳などがみられ、背振山系の山麓部を中心に東十郎・都谷・永田古墳群などの群集墳が数多く築かれる。

当地は肥前国東端で筑前・筑後国と接する三国国境にあたり、大木川を境に北東部は基肄郡、南東部は養父郡に属する。「肥前風土記」によると、基肄郡は「郷陸（六）所、里十七、驛壺所小路」とあり、養父郡は「郷肆（四）所、里一十二、蜂壺所」とある。基肄郡家の位置は確定していないが、八ツ並金丸遺跡では大型掘立柱建物跡、大久保遺跡からは同時期と推定される建物跡が多数検出しており関連が注目される。養父郡家は、蔵上町の老松神社西周辺を推定地としているが、これを裏付けるように蔵上遺跡から掘立柱建物跡を多数検出し、「厨番」と記した墨書土器が出土している。集落は基肄郡では三ヶ敷梅坂・加藤田遺跡・本原遺跡など、養父郡では惣楽遺跡・柳の元遺跡・蔵上遺跡などが確認されている。律令体制が衰退する平安時代後期以降、鳥栖地域においても荘園が形成されるようになり、13世紀末には基肄・養父両郡のほぼ半数の耕地を荘園が占めるに至る。この大部分は大宰府天満宮安楽寺領で、あとは宇佐八幡宮弥勒寺領だが、実質的には土々呂木・曾禰崎氏などの御家人地頭によって荘園が支配されていた。今泉遺跡では濠を巡らした屋敷地をみることができる。

室町時代に入ると、鳥栖市域を含む東肥前地域は南北朝の動乱の場となり、戦国時代にはいと、明応6年（1497）に筑紫氏が鳥栖地域を押さえて以降、天正14年（1586）に鳥津氏に攻略されるまでの約90年間、勝尾城本城のほか支城群が構成され、武家屋敷や町屋など城下町も形成されている。

近世以降、基肄郡と養父郡の東半分は対馬藩領に、養父西半は佐賀藩領となる。また長崎街道が整備されるとともに両藩領域にはそれぞれ田代宿、轟木宿が設けられた。田代宿には代官所が設置され、轟木宿では佐賀藩の番所が設置されていた。明治16年に佐賀県となり、昭和29年には、鳥栖町・田代町・基里村・麓村・旭村の5町村が合併し、平成26年には市制60周年を迎え、今日に至っている。

Ⅲ. 京町遺跡周辺の状況

京町遺跡は、鳥栖駅の北西に位置し、九千部山系から南東に派生する低～中位丘陵の縁辺部付近に立地する。同丘陵端部に所在する周辺の遺跡としては藤木遺跡、今泉遺跡、内畑遺跡などがあげられる。鳥栖駅より南東方向には藤木遺跡が所在するが丘陵の先端付近にあたる。

京町遺跡を含めた鳥栖駅周辺の遺跡分布の状況は下記のとおりである。

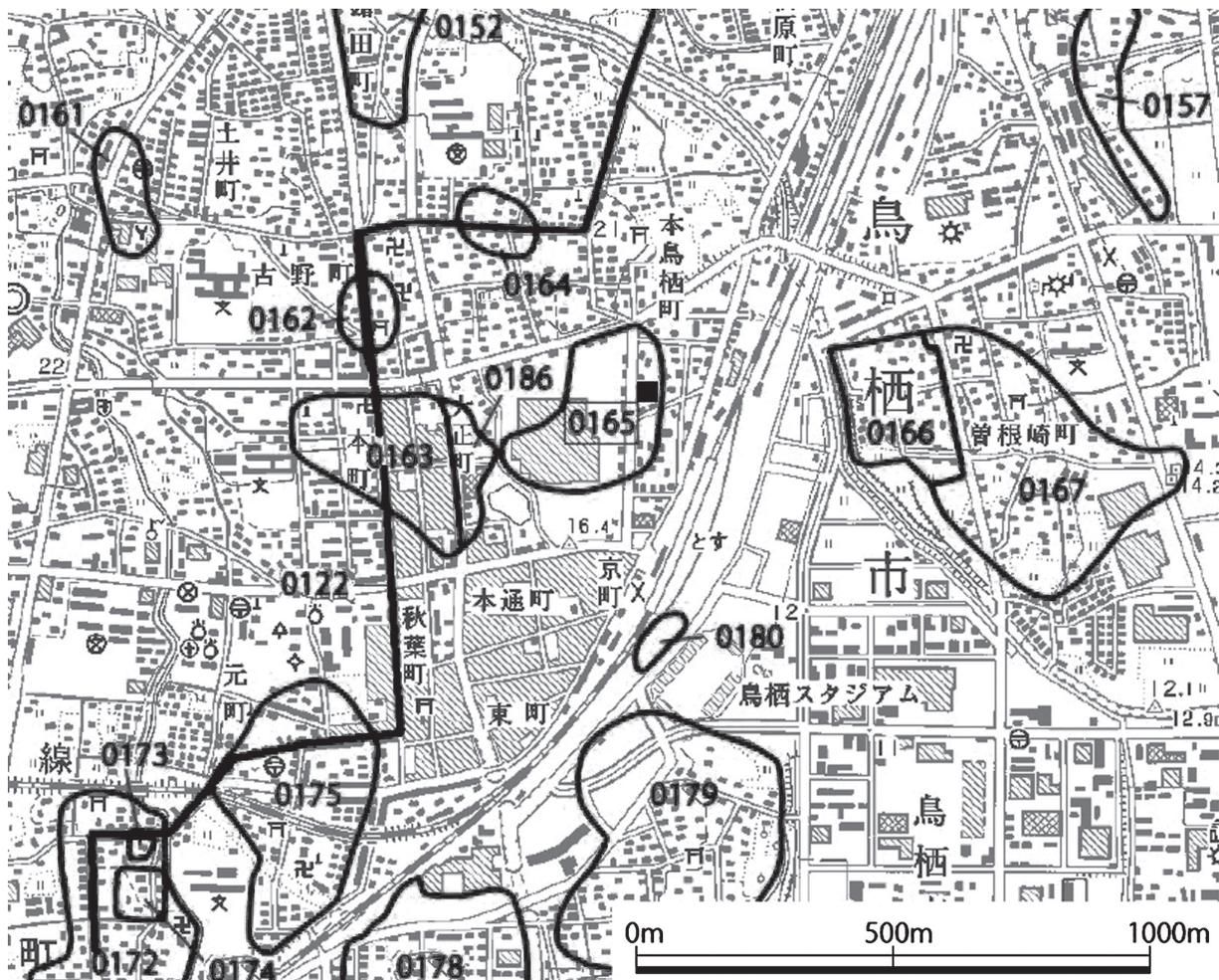


図2 周辺遺跡分布図（佐賀県遺跡地図より）

122…長崎街道	152…天神木遺跡	157…下原遺跡	161…原口遺跡	162…町上遺跡
163…西浦遺跡	164…上鳥栖遺跡	165…京町遺跡	166…曾根崎城	167…四ツ木遺跡
172…町屋敷遺跡	173…轟木番所跡	174…轟木御茶屋跡	175…内畑遺跡	
178…今泉遺跡	179…藤木遺跡	180…森園遺跡	186…小原遺跡	

最近の調査で、京町遺跡からJR鳥栖駅を挟み南に位置する旧鳥栖操車場跡地の藤木遺跡から、大規模な環濠を伴う弥生時代後期の拠点集落の一部が確認された。ここからは副葬直前に二つに破碎した四葉座内行花文鏡を副葬した土壇墓も確認され、現鳥栖駅周辺地域の重要性が注目されるようになってきている。また、内畑遺跡からはガラス製の勾玉と小玉の頸飾が副葬された後期前葉の甕棺墓が過去に発見されている。こうした状況は、柚比遺跡群が弥生時代中期末以降、集落の伸長に衰退の傾向をみせるのと対称的である。弥生時代後期から古墳時代につながる発展過程の時代の中で、京町遺跡から藤木遺跡、内畑遺跡の一角が、当時の地域社会構造の中で重要な役割を果たしており、柚比遺跡群あるいは市南西部の遺跡群にとって替わる鳥栖地域における拠点地域としての可能性が指摘されつつある。

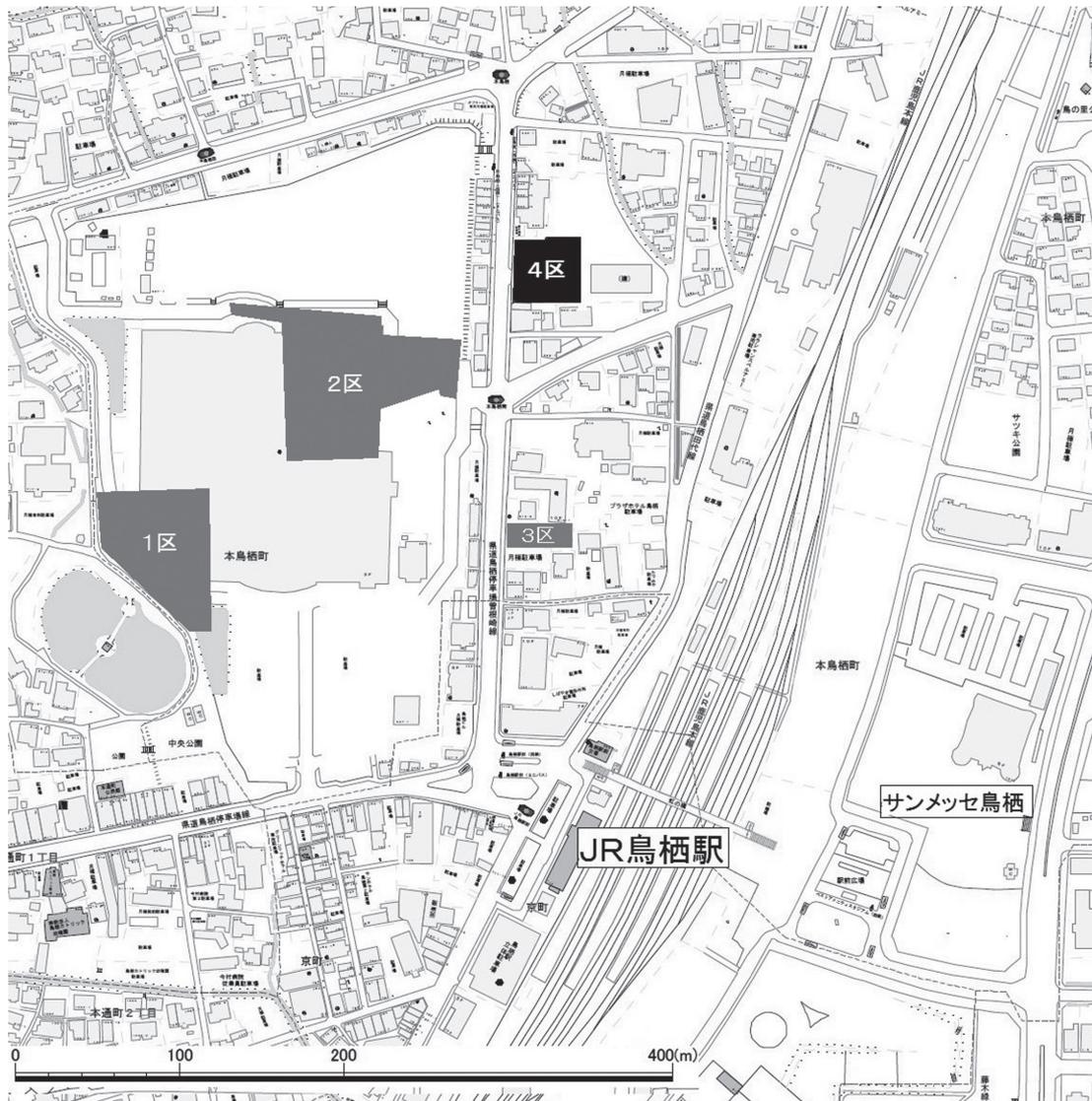


図3 京町遺跡調査区位置図

第3章 調査の内容

今回の本調査地点は、九千部山系から南東に派生する低～中位丘陵の縁辺部の大木川右岸に立地し、現況地表の標高は、20 m前後である。京町遺跡4区の調査対象地は昭和初期に創業した酒造会社の跡地で、醸造施設や倉庫、店舗が建っていた。酒造会社は昭和50年頃に廃業している。本調査は確認調査の結果を受け、遺構が集中し残存している範囲をA区、B区、C区の三つに分け調査を実施した。調査区以外の範囲については広い範囲で土地の改変が行われており、遺構は残っていなかった。調査を実施したA区～C区についても酒造会社の建物基礎と考えられるコンクリート塊が多くみられた。建物の解体時にも破壊を受けているようである。調査区の配置は図4のとおりである。

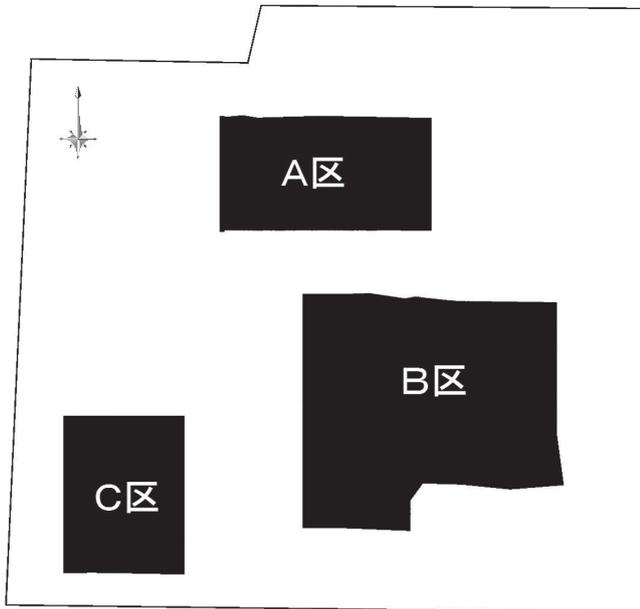


図4 京町遺跡4区調査区配置図

東西に長い長方形の調査区で溝が3条と小穴が確認された。後世の掘削等により地山面まで広い範囲で破壊を受けている。表土剥ぎ取り作業時には以前あった酒屋の倉庫建物のコンクリート基礎や倉庫の壁に使われた赤レンガの破片が多く埋土に混じていた。その他、日本酒瓶、ジュース瓶、徳利の破片など酒屋に関連するものも多く見られたほか、珍しい遺物としては耐火煉瓦が確認された。

A区の調査

東西に長い長方形の調査区で溝が3条と小穴が確認された。後世の掘削等により地山面まで広い範囲で破壊を受けている。表土剥ぎ取り作業時には以前あった酒屋の倉庫建物のコンクリート基礎や倉庫の壁に使われた赤レンガの破片が多く埋土に混じていた。その他、日本酒瓶、ジュース瓶、徳利の破片など酒屋に関連するものも多く見られたほか、珍しい遺物としては耐火煉瓦が確認された。

は以前あった酒屋の倉庫建物のコンクリート基礎や倉庫の壁に使われた赤レンガの破片が多く埋土に混じていた。その他、日本酒瓶、ジュース瓶、徳利の破片など酒屋に関連するものも多く見られたほか、珍しい遺物としては耐火煉瓦が確認された。

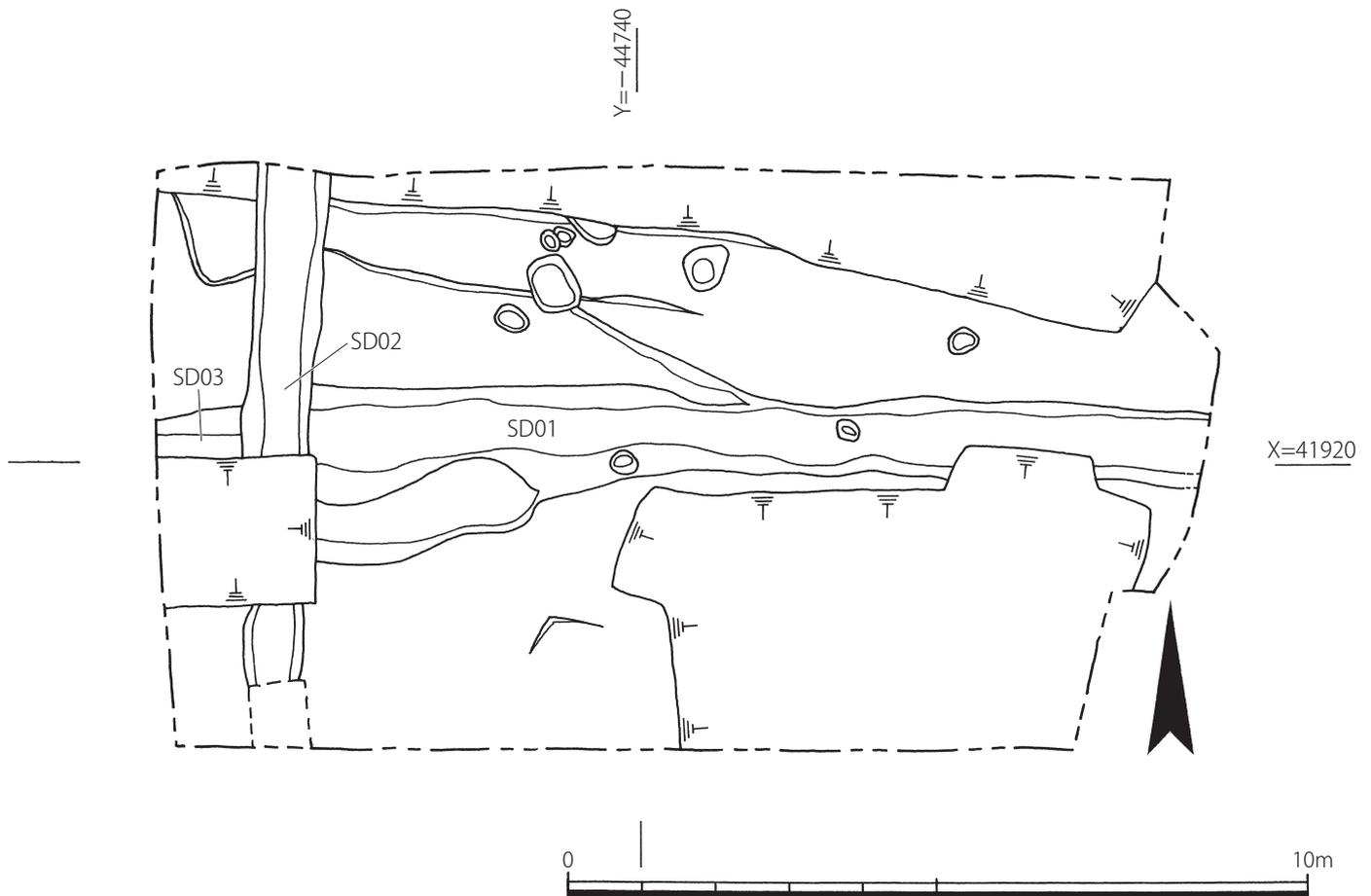


図5 A区遺構配置図 (1/100)

SD01 (図6)

A区の中央を東西に走る。SD02と重複しSD02より古い。確認された全長は12mで、幅は1～1.5mである。深さは西端で30cmを測る。地形に沿って東へ向かって緩やかに下っている。調査区の東端付近で消滅している。弥生土器の小破片が数点出土した。詳細な時期の特定には至らなかった。

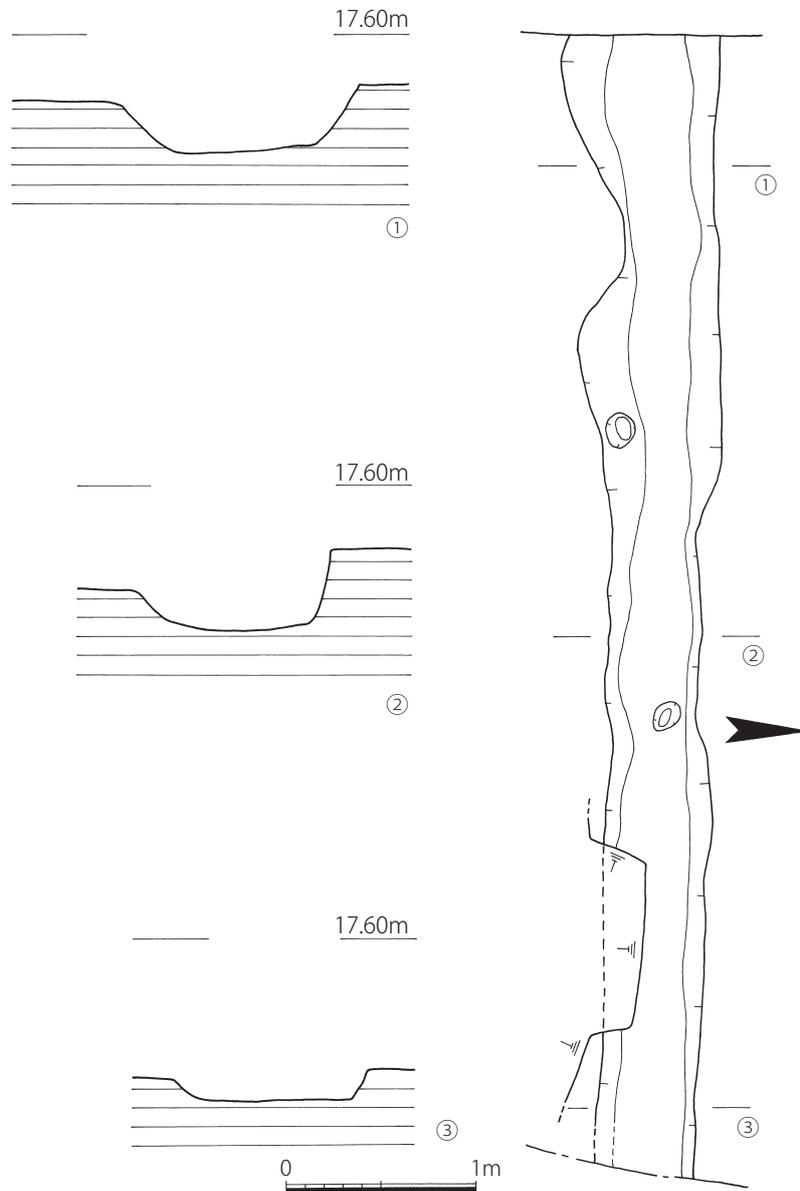


図6 SD01遺構 (1/40)

SD02

A区の西端付近を南北に走り、SD01重複する。(前後)新旧関係は、SD01より新しい。SD03が直角に交わる。SD03とは遺構検出時に前後関係を確認することができなかったことから、同時期に存在したと考えられる。区画溝の一部の可能性ある。SD02は全長7mほどが確認できたが、戦後にあった酒屋の井戸、建物基礎等で削平されており、完掘できたのは半分ほどであった。溝の幅は1.0mで深さは確認できた最深部で50cmであった。断面はU字形である。土師器の小片が数点出土した。中世の区画溝の一部と考えられる。

SD03

調査区の西端で一部、1 mほどを確認できたものである。SD02とほぼ直角に交わる。後世の井戸に削平されており溝幅、深さは不明である。遺物は出土しなかった。SD02とは同時期に存在したと考えられる。

B区の調査



図7 B区遺構配置図

調査対象地は南北 16 m、東西 17 m の長方形の調査区である。調査面積の東から約 3 分の 1 付近は、以前の酒造会社の建物基礎による攪乱、削平等を受けており遺構の大半は消滅している。わずかに小穴が数基見られるが残りは良くない。調査区は東側に向かって層を増し、暗茶褐色土の礫層が堆積する。調査前の現地表面から 0.5 m ~ 1.4 m 掘り下げて遺構面に至る。遺構の内訳は、弥生時代の土坑 2 基、溝状遺構 1 条、中世の土坑 2 基、小穴が多数検出した。

SK01 (図8)

B区北側の中央付近にて検出された。すぐ北側にSK04が存在する。長軸は3.43 m、短軸は1.44 mの隅丸長方形で、深さ39cmを測り、底面はほぼ平坦である。遺構の時期は中世と考えられる。

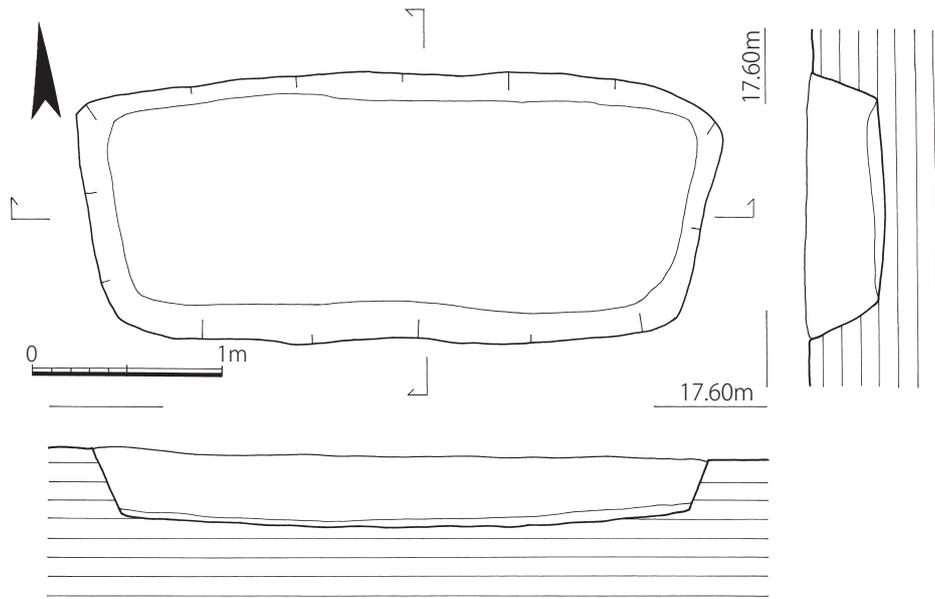


図8 SK01 (1/40)

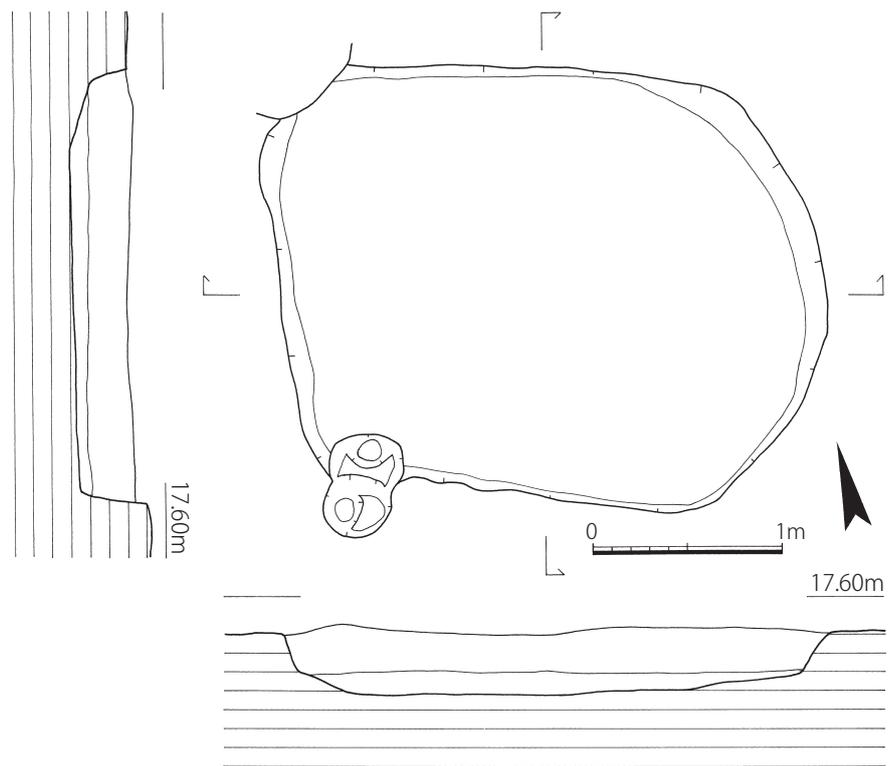


図9 SK02 (1/40)

SK02 (図9)

B区南側にて検出され、すぐ西側にSK03が存在する。遺構の規模は長軸3.0m、短軸は2.5mの隅丸長方形で、深さ50cmを測り、底面部は丸みを帯びる。遺構の時期は中世である。

SK03 (図10)

B区南側にて検出された土器溜まり遺構で、すぐ西側にSK02が存在する。遺構の規模は長軸2.0m、短軸は0.86mの隅丸長方形で、深さ54cmを測り、完掘後の状況は、南側の約半分の底面が一段深くなり、形は丸みを帯びる。遺構の時期は弥生時代中期。

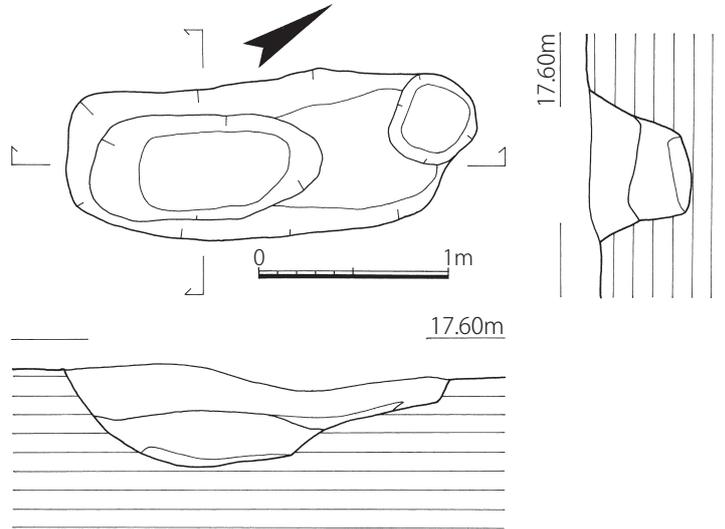


図10 SK03 (1/40)

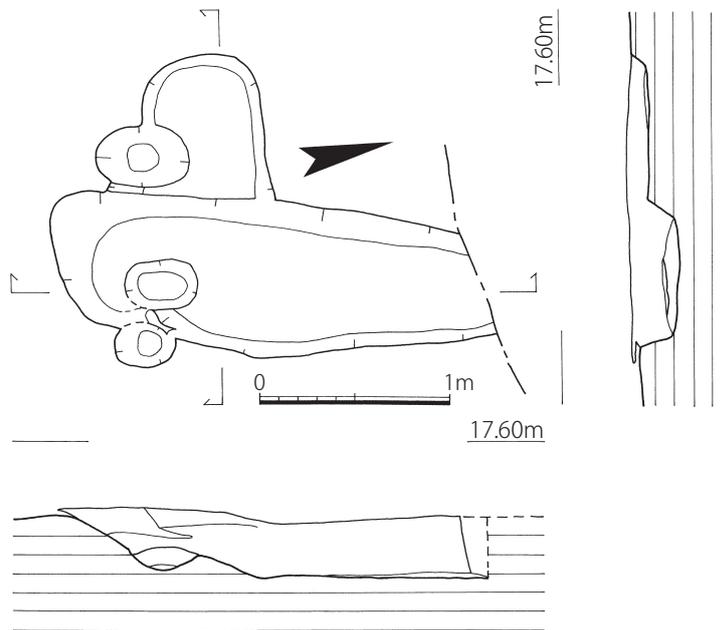


図11 SK04 (1/40)

SK04 (図11)

B区北側にて検出された土器溜まり遺構で、南側にSK01が存在する。一部完掘できていないため、遺構の規模は現況で長軸2.2m、短軸は82cmの隅丸長方形と推定する。深さは30cmを測り、底面部はほぼ平坦面である。遺構の時期は弥生時代中期。

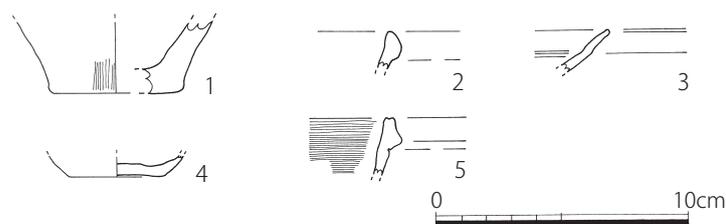


図12 SK01出土遺物 (1/3)

SK01出土遺物 (図12-1～5)

1は弥生の甕、2は白磁碗の玉縁状口縁、3は青磁の皿、4は土師器皿、5は瓦質土器の鍋。

SK02出土遺物 (図13-6～41)

6から36は土師器の皿、37は瓦質土器の皿、38は青磁の皿、39と40は青磁の碗、41は青磁の盤。

SK03出土遺物 (図14-42～57) (図15-58～65)

42～57は弥生土器の甕で、42～51は甕の口縁部、52～57は甕の底部。58は弥生土器の鉢。59は壺の口縁部か。60～65は器台。

SK04出土遺物 (図16-66～69)

全て弥生土器である。66～68は甕で69は器台。

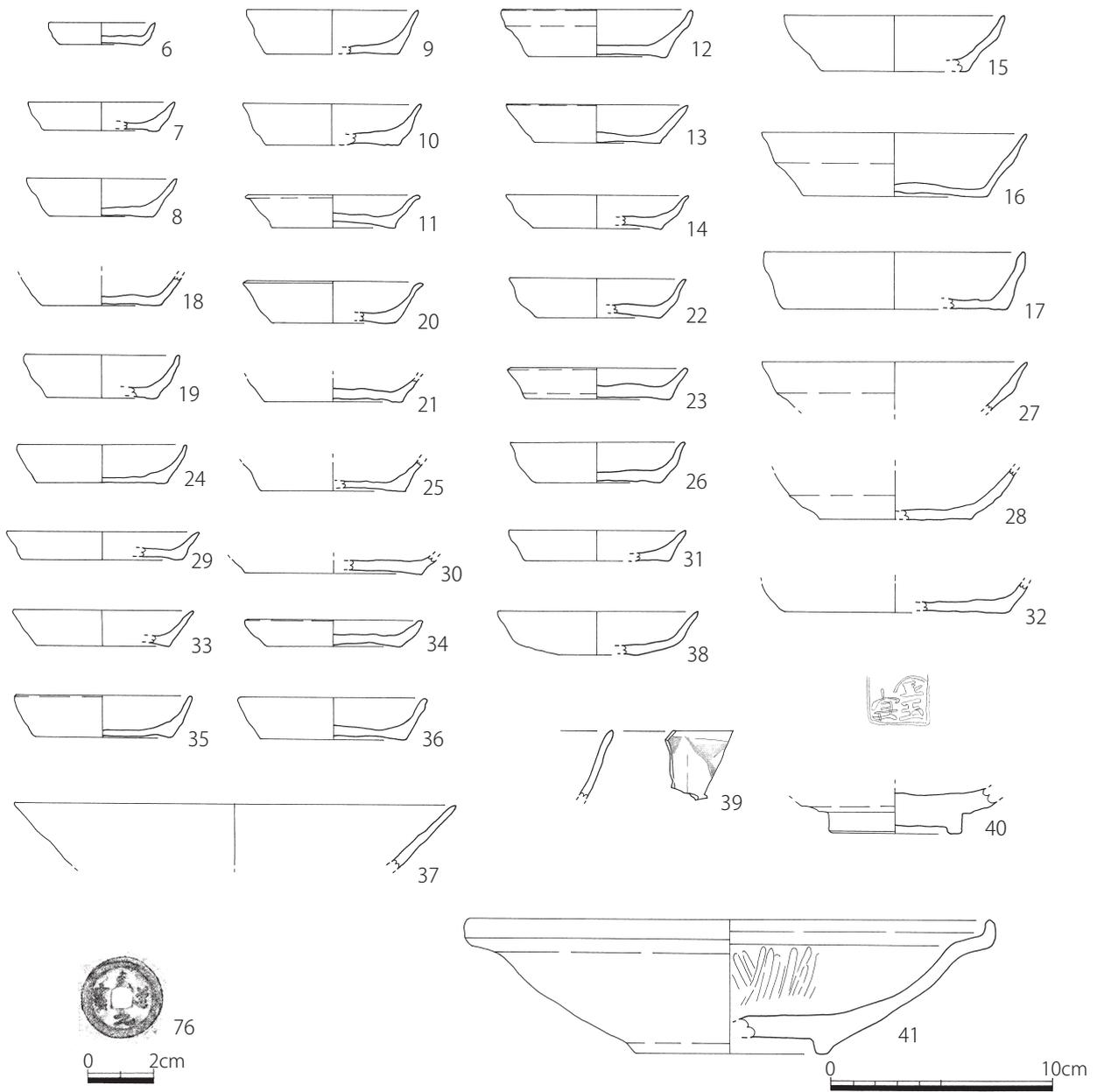


图13 SK02出土遺物 (1/3)

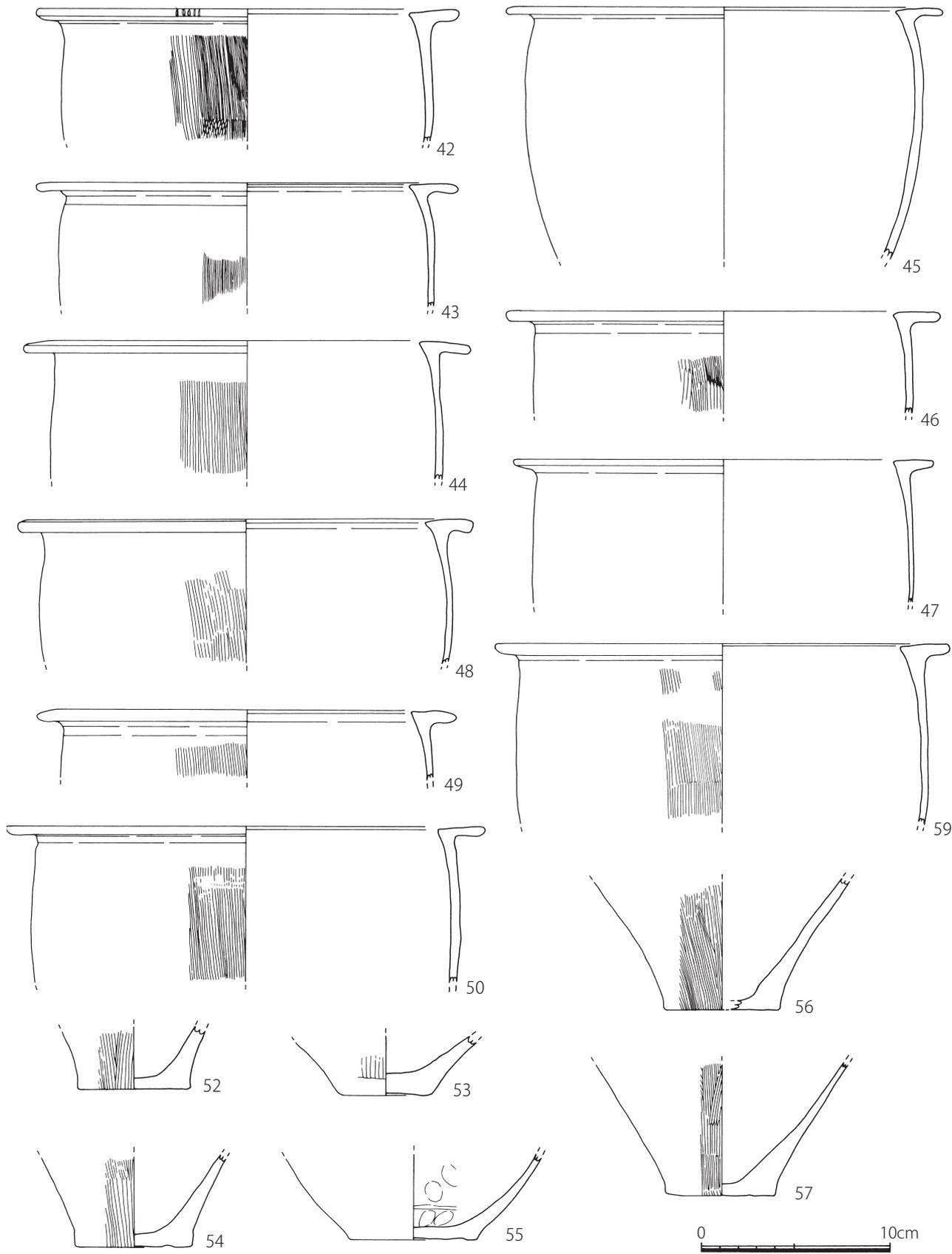


图14 SK03出土遗物(1)(1/3)

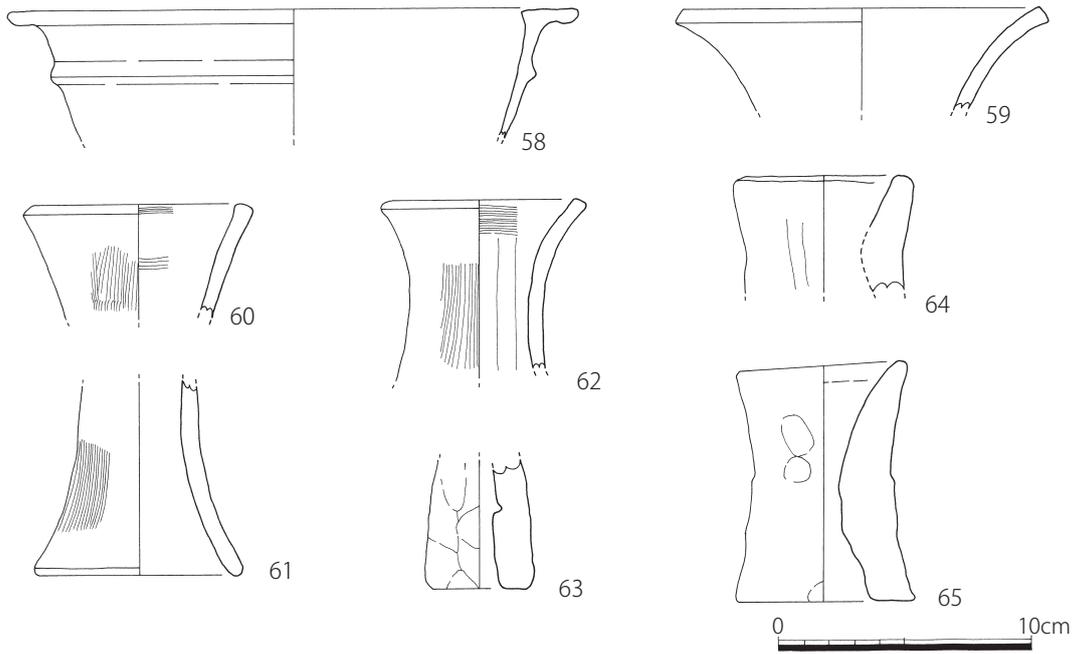


图 15 SK03 出土遺物 (2) (1/3)

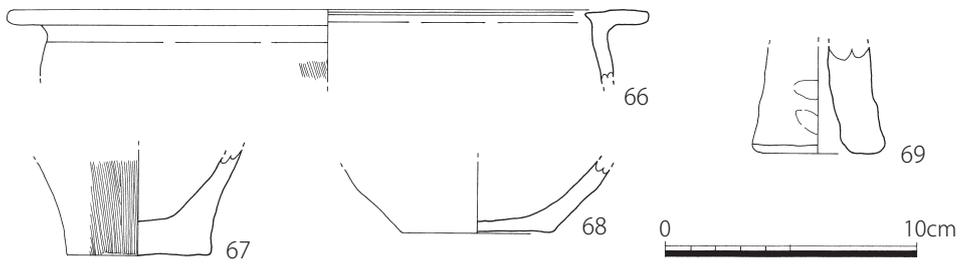


图 16 SK04 出土遺物 (1/3)

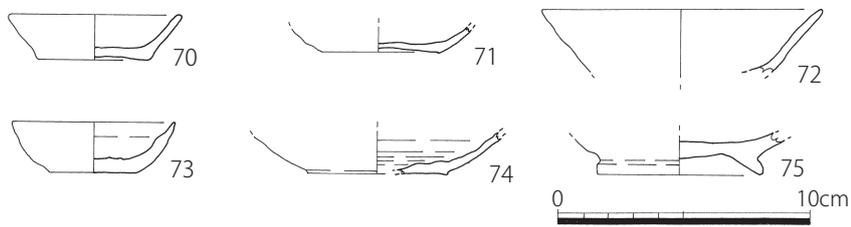


图 17 小穴出土遺物 (1/3)

C区の調査

調査対象地の南西角付近に位置する。南北 11 m、東西 7.2 m のほぼ長方形の調査区である。遺構は深さ 50 cm ～ 80 cm 程で確認され、東へ向かい緩やかに下っている。調査区の東端付近は大きく削平されていた。酒造会社の施設で、倉庫及び水槽（内部が冷蔵庫）が建っていた辺りで解体時に地山付近まで削平されている。表土にはコンクリート塊、ガラス瓶破片、赤レンガ片等が多く混じっていた。



図 18 C区遺構配置図 (1/100)

SD05 (図19、20)

C区を東西に横切る溝で、確認された全長は 6.28 m、溝幅は 0.55 m から 0.71 m であった。深さ 0.38 m から 0.40 m で地形に沿って東へ緩やかに下っている。A区のSD03とはほぼ平行な位置関係である。A区のSD02とは調査区外の延長線上で直行する可能性が考えられる。A区のSD02、SD03とともに何らかの区画をなす可能性が高い。

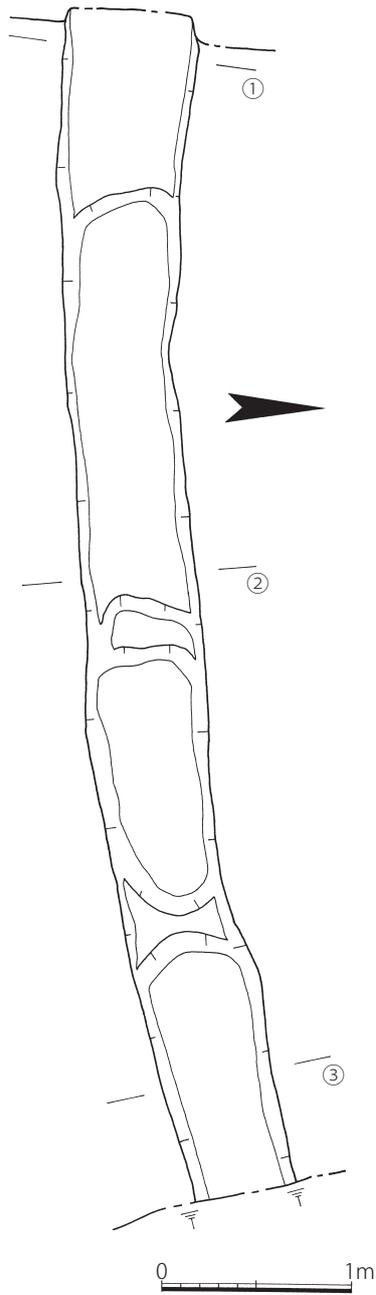


図19 SD 05 (1/40)

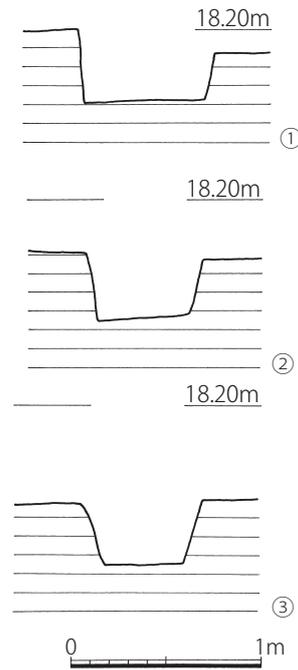


図20 SD 05 断面図 (1/40)

SK 05 (図21)

C区の南端中央付近に位置する。遺構の一部が調査区外にかかる。長軸 1.88 m、短軸 1.64 mの隅丸でほぼ正方形である。深さは 20cm前後で上部は削平されている。

SK 06 (図22)

C区のほぼ中央西よりでSD 05の南側に位置する。長軸は 1.24 m、短軸は 0.93 mの楕円形で、最深部は 0.33 mである。

SK 05 出土遺物 (図23)

七輪の破片が出土した。時期は不明。

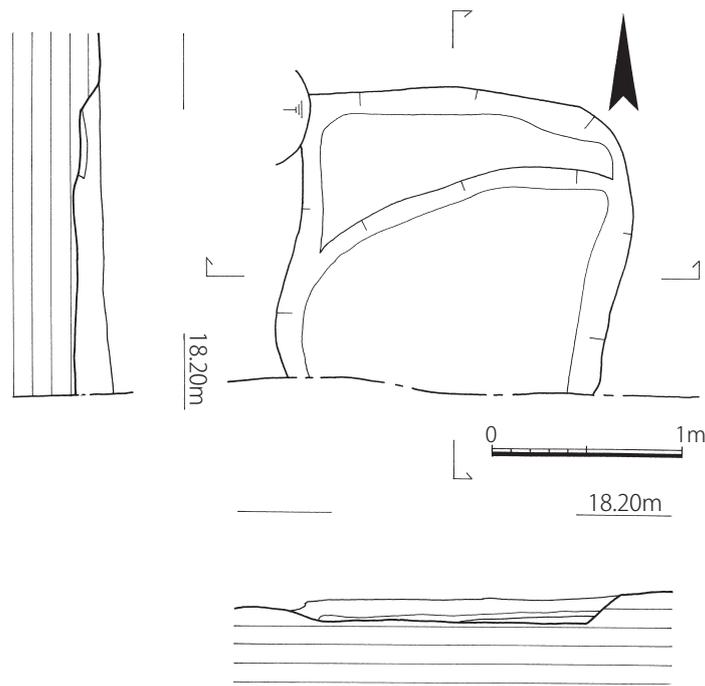


図21 SK 05 (1/40)

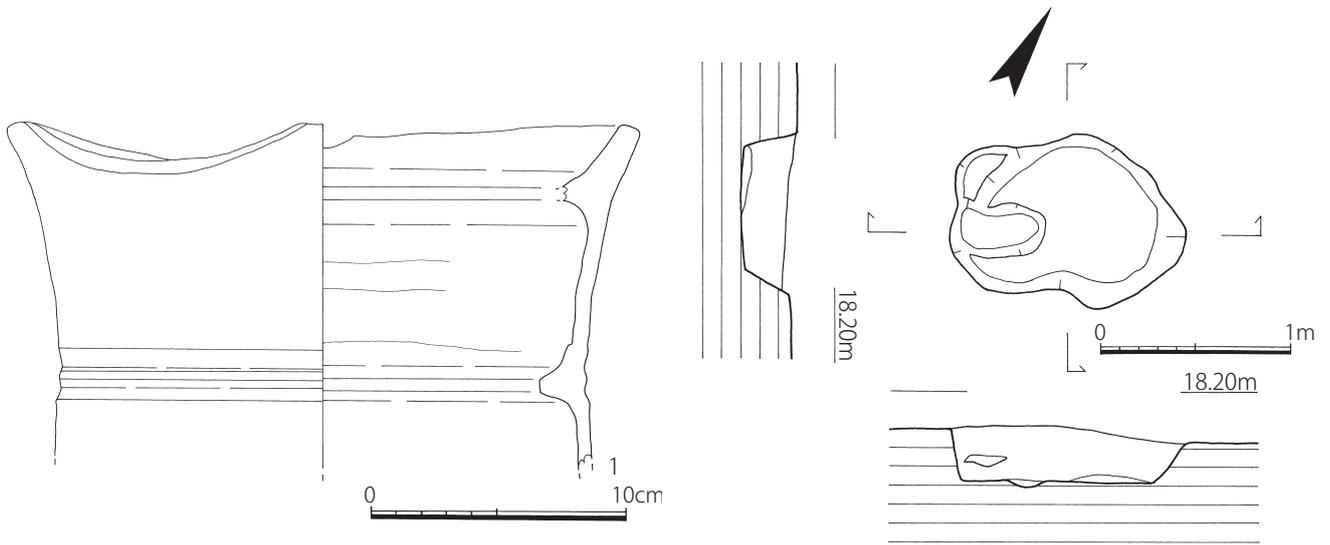


図23 SK 05 出土遺物 (1/3)

図22 SK 06 (1/40)

SD 05・SK 06 出土遺物 (図24-1～16)

1は青磁の碗、2～4は瓦質土器の碗、5～13は土師器の皿、14・15は土師器の坏身、16は陶器の鉢である。

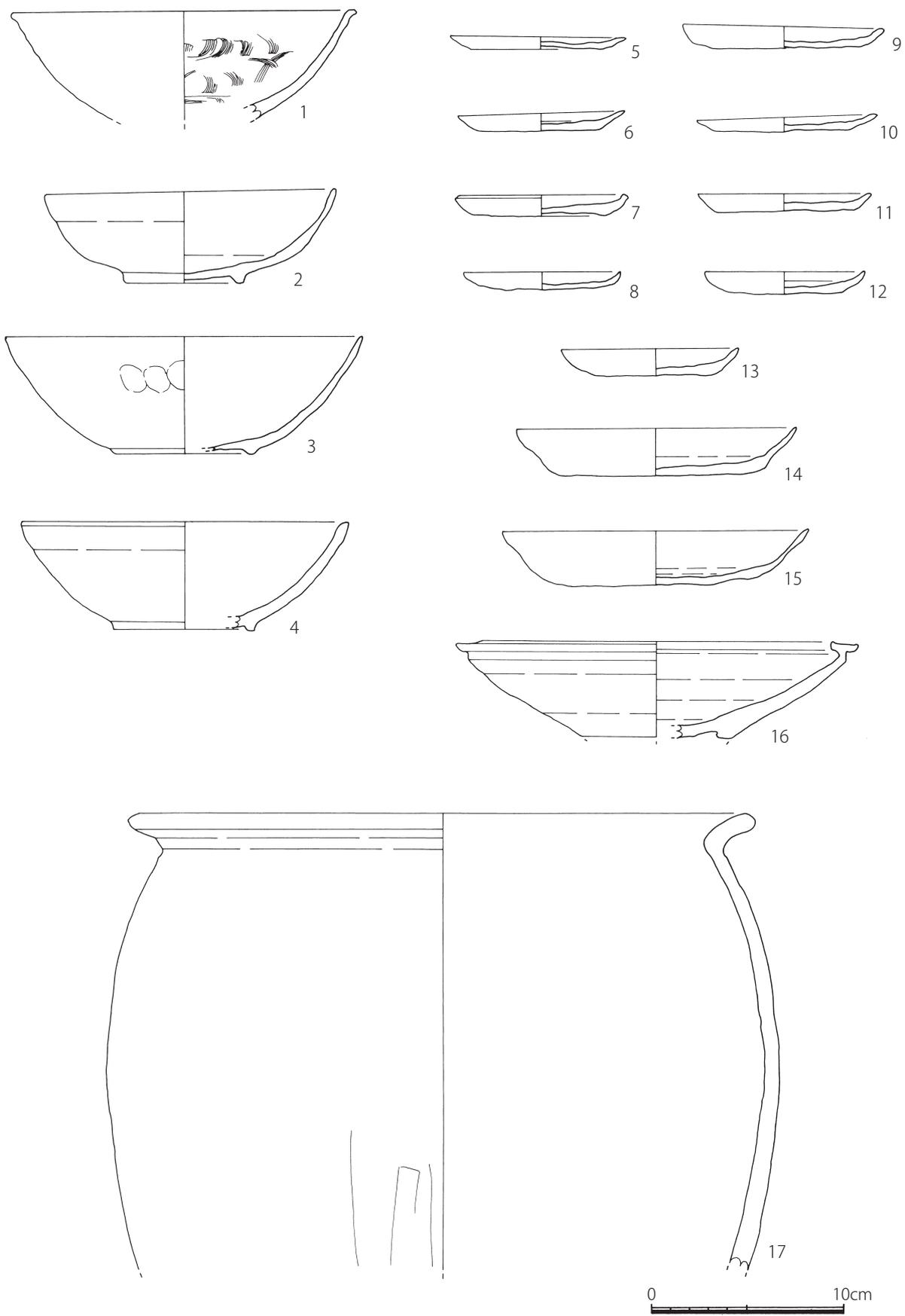


图24 SD05·SK06出土遺物 (1/3)

第4章 まとめ

最後に京町遺跡4区の調査で明らかとなったことを簡単に述べ、これまで実施した1～3区の調査の成果について概観し、時期別に整理してまとめとしたい。

今次、4区の調査で検出された遺構より、遺跡の時期は弥生時代中期と中世前期の二時期におよぶ集落の一端が明らかとなった。

注目される遺構としては、B区のSK02である。SK02は比較的に残りも良く、時期の指標となりうる中国龍泉窯の青磁と土師器が出土し、中国の青花は全く出土していないことから、鎌倉～南北朝・室町時代の前期に比平され、概ね13世紀～14世紀頃と考えられる。また、遺構の平面が隅丸長方形を呈し、出土遺物の状況より土壇墓の可能性も考えられる。

小穴については、掘立柱建物の可能性があるような柱穴と考えられるものも一部認められるが、明確な建物配置の把握までは至らなかった。出土遺物より概ね中世前期の時期と考えられる。

次に過去に実施された1区～3区の調査を含めてまとめてみたい。

南西に約280m離れた地点の1区の調査では、中世後期（室町時代終わり～戦国時代）の概ね16世紀前半を下限とする集落跡が確認され、市の北西部の山浦町に所在する戦国時代後期の勝尾城の山浦新町遺跡（新町屋跡）の前身となる可能性が示唆される。

また、南西に約70m離れた比較的近接する地点の2区の調査において弥生時代前期末からの後期前葉にかけての集落が確認されていた。本調査区においても、ほぼ同時期の弥生時代中期の溝、土壇が認められことから、恐らく集落の広がり的一端が判明できた。

最後に南に180m離れた地点の3区の調査においても、ほぼ同時期の弥生時代と中世（室町～戦国時代か）の遺構が検出されていることから、現市街地に当たる京町遺跡は、大きく弥生時代と中世の集落とその営みの様相が徐々に明らかになってきた。

以上簡単であるがこれまでの本遺跡の発掘調査について概観したが、遺跡範囲に対して、調査事例が少ないため、未解明な範囲を多く残している、また近接する周辺遺跡との関連についても、時間の制約上検討することができなかった。

今回の調査対象地は昭和初期より酒造会社（兼行酒造）が営まれていた場所である。昭和50年頃まで営業が続けられていた。現在も隣地には木造2階建ての主屋（母屋）が残っており、建設時期は門棟墨書から昭和2年2月頃と推測される。調査時にB区には酒造施設の痕跡と思われる掘り込みが見られた。「MYT、SK32」の刻印の入った耐火煉瓦が出土したことから、高温度の醸造施設、酒米を蒸して醗酵させる「かまど」があったことが推測される。刻印のSK32は耐火度の基準で、1200～1300度程の温度に対応する。耐火煉瓦の製造元については判明しなかった。南側隣接地との境界には赤煉瓦の壁が現存している。これはイギリス積みの工法で作られており、大正から昭和初期の施工と推定されている。兼行酒造は、佐賀県近代化遺産の一つに挙げられている。

参考文献

- 「小原遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第9集（1981）
- 「京町遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第54集（1997）
- 「西浦遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第71集（2004）
- 「佐賀県近代化遺産」佐賀県文化財調査報告書第153集（2002）

表1 京町遺跡4区 出土遺物観察表

寸法の単位はcm ()は復元径 ()は残存径

番号	遺構	種別	器種	寸法			色調 () 内面	備考	登録番号
				口径	器高	底径			
図12-1	S K01	弥生	甕		(3.8)	(6.6)	褐灰色～灰白色 (褐灰色)		160080
-2	S K01	白磁	碗		(2.0)		灰白色	IV類	160083
-3	S K01	青磁	皿		(2.2)		緑灰色		160085
-4	S K01	土師器	皿		(1.1)	(5.0)	褐灰色～浅黄橙色		160081
-5	S K01	瓦質土器	鍋		(3.0)		灰白色		160082
図13-6	S K02	土師器	皿	(4.8)	1.0	3.8	灰白色	小皿、糸切り	160039
-7	S K02	土師器	皿	(6.6)	1.3	(5.0)	にぶい橙色	小皿、糸切り	160030
-8	S K02	土師器	皿	(6.8)	1.8	(4.6)	橙色	小皿、糸切り	160035
-9	S K02	土師器	皿	(7.8)	2.0	(6.0)	にぶい橙色	糸切り	160028
-10	S K02	土師器	皿	(8.0)	1.9	(6.0)	にぶい橙色	外面煤付着	160027
-11	S K02	土師器	皿	(7.8)	1.5	(5.6)	にぶい橙色	糸切り	160031
-12	S K02	土師器	皿	(8.6)	2.1	6.4	灰褐色、底部黒褐色	糸切り	160022
-13	S K02	土師器	皿	(8.2)	1.8	(5.8)	橙色	糸切り	160021
-14	S K02	土師器	皿	(8.4)	1.5	(5.8)	にぶい橙色	糸切り	160033
-15	S K02	土師器	皿	(10.0)	2.5	(6.8)	にぶい橙色	糸切り	160041
-16	S K02	土師器	皿	(12.0)	2.9	8.4	にぶい橙色	糸切り	160019
-17	S K02	土師器	皿	(11.8)	2.6	(6.2)	灰褐色	糸切り	160025
-18	S K02	土師器	皿		(1.4)	(5.4)	橙色	糸切り	160045
-19	S K02	土師器	皿	(7.0)	2.0	(5.0)	にぶい橙色	糸切り	160034
-20	S K02	土師器	皿	(8.0)	1.9	(5.4)	にぶい橙色	糸切り	160032
-21	S K02	土師器	皿		(1.1)	(6.2)	にぶい橙色	糸切り	160044
-22	S K02	土師器	皿	(8.0)	1.8	(5.6)	にぶい橙色	糸切り	160037
-23	S K02	土師器	皿	(8.2)	1.4	6.6	橙色、底部褐灰色	糸切り	160023
-24	S K02	土師器	皿	(7.6)	1.8	(5.8)	明褐灰色	糸切り	160038
-25	S K02	土師器	皿		(1.4)	(6.6)	にぶい橙色	糸切り	160043
-26	S K02	土師器	皿	(7.8)	1.8	5.6	にぶい橙色	糸切り	160029
-27	S K02	土師器	皿	(12.0)	(2.2)		にぶい橙色	糸切り	160051
-28	S K02	土師器	皿		(2.3)	(7.0)	にぶい橙色	糸切り	160042
-29	S K02	土師器	皿	(8.6)	1.3	(7.2)	にぶい橙色	糸切り	160036
-30	S K02	土師器	皿		(0.8)	(8.0)	にぶい橙色	糸切り	160052
-31	S K02	土師器	皿	(8.0)	1.4	(6.6)	にぶい橙色	糸切り	160040
-32	S K02	土師器	皿		(1.4)	(10.0)	橙色	糸切り	160046
-33	S K02	土師器	皿	(8.2)	1.6	(6.0)	にぶい褐色	糸切り	160053
-34	S K02	土師器	皿	(8.0)	1.2	6.2	にぶい橙色、底部褐灰色	糸切り	160020
-35	S K02	土師器	皿	(8.0)	1.9	(6.2)	灰黄色		160024

-36	S K02	土師器	皿	(8.5)	1.9	6.6	にぶい橙色		160026
-37	S K02	瓦質土器	皿	(10.0)	(2.0)		灰白色		160047
-38	S K02	青磁	皿	(9.0)	2.0		オリーブ黄色、I-1		160049
-39	S K02	青磁	碗	-	-	-	灰オリーブ	龍泉窯系 I-5、 蓮弁文	160050
-40	S K02	青磁	碗		(2.1)	6.0	灰黄色	龍泉窯系 I-5、 見込み金玉満堂	160063
-41	S K02	青磁	盤	(24.0)	6.1	(8.6)	オリーブ灰色	龍泉窯系 III-3	160018
図14-42	S K03	弥生	甕	(30.0)	(9.6)		明黄褐色		160068
-43	S K03	弥生	甕	(30.0)	(8.9)		黄橙色		160074
-44	S K03	弥生	甕	(31.8)	(10.0)		にぶい黄橙色		160067
-45	S K03	弥生	甕	(31.1)	(18.2)		浅黄褐色 (赤褐色)		160070
-46	S K03	弥生	甕	(31.0)	(7.4)		にぶい黄橙色		160071
-47	S K03	弥生	甕	(29.8)	(10.3)		灰白色 (褐灰色)		160073
-48	S K03	弥生	甕	(32.4)	(10.4)		にぶい黄橙色		160064
-49	S K03	弥生	甕	(30.0)	(5.1)		にぶい黄褐色 (灰褐色)		160066
-50	S K03	弥生	甕	(34.0)	(11.3)		にぶい黄褐色		160072
-51	S K03	弥生	甕	(32.2)	(13.1)		明黄褐色		160065
-52	S K03	弥生	甕		(4.5)	(8.0)	にぶい黄褐色		160097
-53	S K03	弥生	甕		(4.3)	6.5	にぶい黄褐色		160094
-54	S K03	弥生	甕		(6.7)	(8.4)	黒褐色～黄褐色 (にぶい黄褐色)		160100
-55	S K03	弥生	鉢		(6.2)	9.2	にぶい黄褐色		160095
-56	S K03	弥生	甕		(9.6)	(8.2)	黒褐色 (黄褐色)		160101
-57	S K03	弥生	甕		(9.6)	7.8	にぶい黄褐色 (褐色)		160093
図15-58	S K03	弥生	鉢	(30.1)	(6.9)		にぶい黄褐色		160076
-59	S K03	弥生	壺	(19.7)	(5.4)		明黄褐色		160069
-60	S K03	弥生	器台	(12.0)	(6.1)		にぶい黄褐色		160077
-61	S K03	弥生	器台		(10.2)	(11.0)	にぶい黄褐色		160079
-62	S K03	弥生	器台	(10.8)	(9.6)		橙色～にぶい黄褐色		160105
-63	S K03	弥生	器台		(6.9)	4.9	橙色		160103
-64	S K03	弥生	器台	(9.6)	(6.1)		にぶい黄褐色		160078
-65	S K03	弥生	器台	9.1	12.8	9.4	橙色		160104
図16-66	S K04	弥生	甕	(33.9)	(3.9)		にぶい黄褐色		160089
-67	S K04	弥生	甕		(5.6)	7.6	黄褐色 (灰黄褐色)		160086
-68	S K04	弥生	甕		(3.8)	(7.9)	赤色～橙色 (橙色)	外面に丹塗り	160087
-69	S K04	弥生	器台		(5.7)	(6.6)	にぶい褐色		160088
図17-70	P-36	土師器	皿	(6.8)	1.8	4.6	にぶい橙色		160060
-71	P-36	土師器	皿		(1.0)	(4.6)	にぶい橙色		160059
-72	P-36	土師器	皿	(11.0)	(2.5)		浅黄褐色		160061
-73	P-42	土師器	皿	(6.4)	2.0	3.4	にぶい褐色		160062

-74	P-18	土師器	皿		(1.7)	(5.6)	にぶい橙色		160057
-75	P-18	瓦器	椀		(1.6)	6.6	灰黒色		160056

番号	遺構名	銭貨名	初鑄造年	重さ(g)	国・王朝名	備考	登録番号
図13-76	S K 02	至道元寶	995年	2.6	北宋		160300

番号	遺構	種別	器種	寸法			色調 () 内面	備考	登録番号
				口径	器高	底径			
図24-1	SD05	青磁	碗	(18.0)	(5.7)		灰白色		160010
-2	SD05	瓦質土器	碗	15.2	5.0	6.2	褐灰色～灰白色		160003
-3	SD05	瓦質土器	碗	(18.6)	6.2	(7.2)	褐灰色～灰白色		160004
-4	SD05	瓦質土器	碗	(17.0)	5.8	(7.4)	褐灰色～灰白色		160002
-5	SD05	土師器	皿	(8.8)	0.7	6.8	浅黄橙色		160016
-6	SD05	土師器	皿	8.7	1.0	6.5	浅黄橙色		160007
-7	SD05	土師器	皿	(9.0)	1.1	6.8	浅黄橙色		160013
-8	SD05	土師器	皿	8.2	0.9	4.5	浅黄橙色		160006
-9	SD05	土師器	皿	10.5	1.3	7.8	浅黄橙色		160011
-10	SD05	土師器	皿	9.4	0.9	7.2	浅黄橙色		160009
-11	SD05	土師器	皿	9.0	1.0	7.2	浅黄橙色		160008
-12	SD05	土師器	皿	8.3	1.2	6.2	浅黄橙色		160005
-13	SD05	土師器	皿	(9.2)	1.9	6.4	明褐灰色		160012
-14	SD05	土師器	坏身	14.6	2.5	11.2	浅黄橙色		160015
-15	SD05	土師器	坏身	16.0	2.9	10.4	浅黄橙色		160014
-16	SD05	陶器	鉢	(21.0)	(5.1)		灰白色		160001
-17	SK06	弥生	甕	(32.7)	(24.2)		橙色～灰褐色		160017
図23	SK05		七輪	(25.0)	(13.8)		灰白色～黒褐色 (灰黄褐色～黒褐色)	内面煤付着	160106



京町遺跡周辺空撮（南から）



九千部山方向遠景



調査区全景 A区・B区



調査区A区



調査区B区



調査区C区 (北から)

写真図版4



SK01 西から



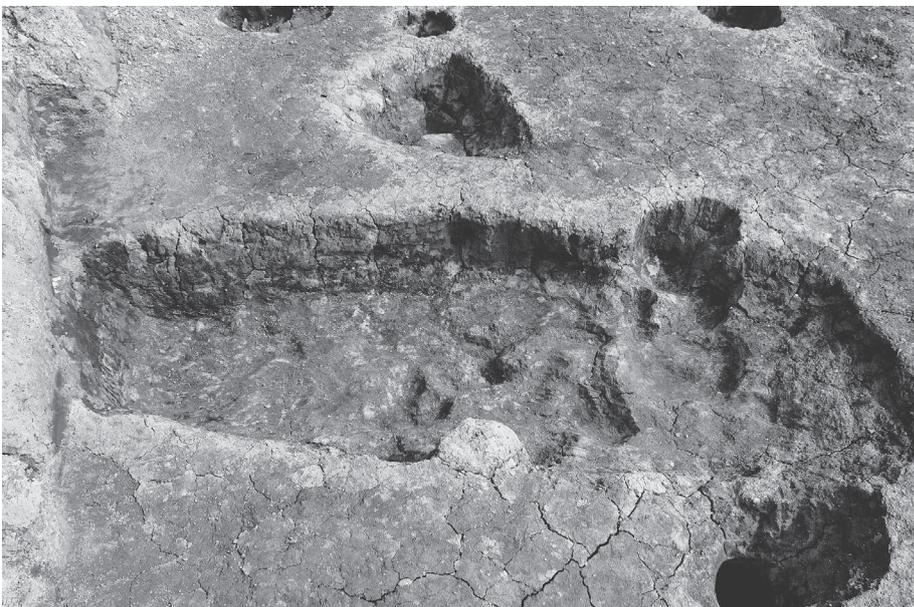
SK02 東から



SK03 北から



SK03 出土遺物状況



SK04 東から



SK05 北から

写真図版 6



SK06 南から



SD02 南から



SD03 東から



SD05 東から



SD05 出土遺物状況



発掘作業状況



SK02出土遺物 (1・2) SD05出土遺物 (3・4・5)



赤煉瓦塀遠景



赤煉瓦塀東から



耐火煉瓦

報告書抄録

ふりがな	きょうまちいせき							
書名	京町遺跡							
副書名	京町遺跡4区埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	鳥栖市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第90集							
編著者名								
編集機関	鳥栖市教育委員会							
所在地	〒841-8511 佐賀県鳥栖市宿町1118番地 TEL 0942 (85) 3695							
発行年月日	西暦 2017年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 ”	東経 。 ”	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きょうまちいせき 4区 京町遺跡4区	さがけん 佐賀県 とすし 鳥栖市 ほんとすまち 本鳥栖町	410213	0165	33° 22’ 36”	130° 31’ 08”	20160201 ～ 20160531	500m ²	マンション 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
京町遺跡	集落跡 墳墓	弥生 中世	土坑、溝、小穴		弥生土器 土師器 青磁			

鳥栖市文化財報告書第90集

京町遺跡

— 京町遺跡4区埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成29年3月31日 発行

発行 鳥栖市教育委員会
佐賀県鳥栖市宿町1118番地

印刷 (株)シオン 三橋印刷
佐賀県鳥栖市蔵上町4丁目152番地